# 水垢を凝視す

佐藤垢石

青空文庫

# 一

鮎が水垢をなめて育つのは誰でも知つてゐる。人間に米や麦が必要であるのと同じやうなものだ。

しかし、水垢のないところでも、鮎は育つ。田園の用水にも、溜池にも棲んで大きくなる。甚しいのになると、相州小田原在山王川のやうな溝川にさへ、盛んに鮎が溯上して来て育つてゐる。だが、水垢のない川に育つた鮎には香気がない。そして、肉がやわらかでおいしくないのである。鮎といふ形を備へてゐるのみで、食味としては劣等品である。

二寸、三寸の小さい頃は主として動物質の餌を食べてゐるが、溯上の途中に立派な水垢を発見すれば、それに食ひ馴染む。興津川や酒匂川、安倍川のやうに瀬が直ちに海へ注ぐ川は、川口にまで転石が磊々としてゐる。それには必ず水垢がついてゐる。三月中旬から河へ向つて、海から来た鮎は直ぐその水垢を発見してなめはじめるのである。だから三四月頃の小さい鮎の腹を解剖して見ると、動物質の餌の外に、必ず水垢が胃袋や、腸の中に入つてゐるのを発見する。

大きな川の鮎は、それとは異ふ。利根川、荒川、那珂川のやうに河口から上流数里乃至二三十里の間に潮の影響のある川は、川底が小砂であるから水垢がつかない。若鮎は、水垢を求め

得られないので、川虫や藻蝦（もえび）のやうな動物質の餌ばかりを食ひながら上流へ、上流へと溯つて行く。砂底を通過しつゝある鮎を解剖しても胃袋に水垢を発見することは困難だ。

若鮎であつても水垢を食べてゐるのと、ゐないのとでは味も異ふ。相模川にしたところが、厚木から下流の砂底や小石底の場所を通過してゐるのを、漁つて食べて見て、久保沢あたりから上流へ来た鮎に比較すれば、その味が劣り香気の低いのを感ずる。興津川の鮎は、海に接した川口附近で漁れた鮎でも、まことにおいしい。それは、早くから水垢をなめてゐるからである。奥利根川などは、六月へ入つてからも、下流から僅かに二三寸の小さな鮎が溯つて来る。形は小さいが味も香気も立派である。やはり立派な水垢を充分食つてゐるからである。

水垢は鮎の生命だ。

## 二

友釣でも、ドブ釣でも技術の真髄を究（きわ）めようとするには、どうしても鮎と水垢との関係を詳（つまびら）かにして置く必要がある。

ドブ釣も鮎の食欲につけ込んだものだ。友釣も結局は、食料問題に絡ませて釣といふ罠を仕掛けたものだ。ゴロ引や、引つ掛は別として鮎釣の正道を行くものは、食料問題を離れてない。殊に友釣に於ては、水垢の問題が大切である。ドブ釣でも水垢の研究は、ゆるがせにでき

ない。鮎の最も好きな水垢が豊富に石についてゐるにも拘はらず、毛鉤を下げればその鉤へ食ひついて来る。これ等のことも、鮎自身でなければ判らぬ領分だ。といつてゝ棄て置いちや、上手な釣人にはなれぬ。

餌のことに疑問を持てば究りがない。その究りないところに深い興味がある。

若鮎は原則として、岸に近いところを溯上するものである。沖上りをやることは甚だ稀である。岸といつても河原寄りを溯る。なるべく崖寄りを避けたがる。だから、鮎の上つた道筋を見ると、稲妻形即ち千鳥形をしてゐるのが普通である。そして、その通路の水際の石に水垢がついてゐれば、それをなめながら上つて行く。汀の石に、小さな若鮎の歯跡がついてゐるのがそれだ。

友釣は、鮎の歯跡を見て釣れといふ言葉がある。だが、いつなめた歯跡であるかといふことが分らないでは、釣りにならない。鮎が幾十里といふ道程を、溯上しながら水垢をなめた跡を「上りなめ」又は「はたなめ」といつてゐる。これは、汀の石に小さな笹の葉のやうななめ跡が、縦横に錯綜してゐるから直ぐ分る。いかにも通りすがりに、急がしさうになめた歯跡である。

しかもこれは、鮎が好んで岸近いところを溯上する習性を物語るもので、「はたなめ」の呼称が生れた所以である。「はたなめ」を「居付なめ」と間違つたら鮎は釣れない。

この川に鮎がゐるか、ゐないかを確かめるにはなめ跡を見るに限る。ところが汀に近いとこ

ろに、なめ跡があるからこれはたしかに鮎がゐると思ひ込んで、釣つたところで掛るものではない。鮎は、そのなめ跡の附近にはゐない。遠く上流へ溯上してゐる。水垢を見ることに研究のつまない人は、「はたなめ」を「居付なめ」と誤認するものであるから、そこはよく注意せねばならないことだ。そして、溯上の道中にある鮎は、たとへ水垢についてゐても、居付鮎のやうに活溌には争闘をしないものである。忙しく次から次へと溯上してしまふ。

そこで「はたなめ」の多い年は、鮎の当り年だ、といふことができる。鮎の大群が汀を溯上する時は、必ず岸に近い石に口をつけて行く。「はたなめ」の多いのを見ると嬉しいものだ。これと反対に「はたなめ」が少いと、鮎は違ひ年だといふことが出来る。鮎が、沖ばかりを溯つて、岸近い石に歯跡を残さない場合もあるが、鮎の習性から見て、それは極めて稀なことである。

## 三

鮎のなめ跡と、誤認し易いなめ跡が汀の石にある。それは、どんこ（だぼはぜ、鯊（はぜ）、かじかの類）も水垢を好む魚であつて、汀に近い石の頭をなめてゐる。そのなめ跡が、鮎のなめ跡によく似てゐるため、これを見て、この附近には鮎が沢山ゐると喜ぶ場合があるが無理もないことだ。しかし、仔細に観察すると、鮎のなめ跡とは異つてゐる。鮎は笹の葉のやうな歯跡を石

に印するが、どんこは、前歯で噛んだやうな歯跡を水垢に残してゐる。そしてどんこは、石の背面や横腹をなめない。主に石の頭ばかりをなめてゐるから、鮎のなめ跡と区別することができる。

「はたなめ」に対して「居付なめ」といふのがある。「居付なめ」の新しいのを発見すれば大いに釣れる。「居付なめ」は概して水の深いところに多い。岸に近いところにもないではないが、これは少くない。川が薄濁りに濁つた場合とか、夜間静かな時に出て来て岸に近いところに在る石をなめるのであるから、深いところで安心してなめてゐるのと違ひ歯跡がまばらの場合が多い。溯り鮎の「はたなめ」と居付鮎の「はたなめ」とは簡単に区別し得る。溯り鮎の「はたなめ」は歯跡が短かく小さいが、居付鮎の「はたなめ」は幅が広く、丈が長い。歯跡の長さが五六寸に及ぶものを見ることさへある。

居付鮎は、実に丁寧に石をなめるものである。底石が、黒く地肌を出す程なめ尽す。なめ尽すと、居場所を替へるから、石が真つ黒に変つてゐるところは、もう鮎の数が少くなつてゐると見てよろしいのである。ところが、鮎の群が新しい水垢を発見して集り来つたところへ囮鮎(おとり)を放てば、忙しい程釣れる。鮎が新しい水垢を争ひなめてゐるのであるから、他から侵入者があれば容赦なく突つ掛つて来る。鈎に掛る。

鮎は新しい垢、新しい垢と求めて移動して行くものである。腐つた垢には、鮎はついてゐない。早春からの古い垢がついたまゝ、洪水がないため川底の石が、黄色になつて行くのを、川

が腐つたといふ。川が腐れば、鮎は囮鮎を追はない。食料を争ふ気持にならないからだ。かうなれば、友釣は万事窮すである。手を拱(こまぬ)いて磧(かわら)に座すのみである。

ところが、一度水が出て、川底の石を綺麗に洗ひ去り、水が治つて一週間か十日もたつと、川底の石に薄く新しい垢が乗つて来る。この時こそ、釣人は見遁してはならぬ。鮎は長い間腐つた垢に閉口して居り、また出水によつて食料を失ひ、ペコ〳〵に腹を空かせてゐる場合であるから、新らしいおいしい水垢を発見すれば、狂気のやうになつて争ひ食ふ。そこへ囮鮎を放つと、文句なしに掛つてしまふ。だから、釣人は出水(でみず)後の十日か、一週間が最も大切な時と思はねばならぬ。

## 四

出水があつて、川底の石を洗つた跡を「白川」と呼ぶ。「白川」では、鮎が釣れないのを普通とするが例外もある。

大きな岩のかげ、又は沈床のかげ、玉石の根まわりには、出水があつても水垢が残るのである。何処の川底も出水のために綺麗に水垢を洗ひ去られると、鮎はやせてしまふ程に腹が減つて来る。事実に於て、出水後の鮎は出水前の鮎に比べて同じ丈でも目方はぐつと減つてゐる。それ程空腹になるのであるから、鮎は必死になつて餌を求める。偶々、岩のかげや、玉石の根

まわりに残り垢を発見するとそこへ集つて来て、多数で争ひ食ふのである。そこへ囮鮎を放てば必ず釣れる。

故に、白川となつても諦めては早計である。垢の残つてゐさうなところを仔細に観察し、川の中へ足を踏み込んで、爪先で石のまはりを撫でまはして見て、そこに少しでも残り垢のあるのを発見したならば、必ずその附近に鮎がゐるものと思つていゝ。釣人がこんな場所を発見すれば、鮎を一人占めに釣ることが出来る。

川が濁つても鮎は釣れる。川へ膝まで入つて、足の甲が見える位の濁りならば、友釣に掛るものである。濁つた時の方が却つて釣れる場合がある。鮎は人の姿を恐れる。だから汀(みぎわ)に近いところに、新らしいおいしさうな垢があつても日中は近よらないものである。ところが、川が薄濁りになつて来て、身を隠すに適当であるならば、深いところにゐた鮎は争つて汀近くへ集つて来て盛に遥か遠くから指をくわえて眺めてゐた垢石になめつくのである。川が濁つたならば、ヘチを釣れとはこのことをいふのである。そこで、濁りが消え水が去つた後、岡へ上つた石を見ると鮎の歯跡が縦横に印せられてある。これを「岡なめ」といふ。「岡なめ」は居付鮎が残したものゝみを呼ぶのではない。溯上期の鮎も「岡なめ」を残す。それは、四月末から五月、六月の若鮎の溯上最も盛んな頃は、山から雪が解けて来るか、打ち続く霖雨(りんう)のため、川の水は極めて多い季節である。その頃、岸に近いところの石をなめた跡は、渇水期になると岡へ上つてしまふ。だから、暑中になると岡石に鮎のなめ跡を発見するものだ。

## 五

出水がなくとも、石に新しい垢がつく場合がある。それは、石についた水垢は出水のないこと数十日に及ぶと随分厚くなる。垢が厚くなつて腐ると、太陽の熱を受けて垢の面に小さい泡を吹いて自然に剥げて流れ去るものである。この流れ去つた後へも新しい垢がつく。その場合も出水によつて新しい水垢がついたのと同じ条件で釣れる。

新しい水垢は、川一帯に同時につくものではない。それと同じに、川一帯に同時に腐るものではない。水垢は太陽の光線に近い汀の石や、ゆるやかな流れのところから腐りはじめて、次第に深いところへ、激流へ及んで行くものである。だから、岸に近いところの水垢が腐つてゐても深いところや、奔湍（ほんたん）の真ン中へは立派な垢がついてゐるのである。激流の中の垢は、いつも新しくまた質が良いと考へていゝ。鮎が好んで激流に棲むといふのはこれがためである。汀に近い石が腐つてゐても、その川を見限つてはならぬ。必ず流れの激しいところを試釣すべきだ。

汀に近い腐つた石にも、新しい垢がつくことがある。川へ立ち込んで釣る場合が多い。だから、汀に近い石は釣人の草鞋（わらじ）のために踏みにじられる。踏みにじられると、腐つた垢は洗ひ去られるからそこへ新しい垢がつくのは当然である。

目ざとい鮎は、決してこれを見遁しはしない。機会があれば、その新しい垢をなめようと心掛けてゐる。だが、日中は釣人の影を怖れるために、汀へは近づいて来ない。夕方が来て、釣人が岡へ上り、帰り仕度をはじめて川が静かになると鮎はあたりの様子を窺ひながら、汀の石に近づいて、背鰭が水面に出でんばかりのところで水垢をむさぼり食ふ。これを「夕暮の食出し」といふのである。夕暮の食ひ出しを釣ると、まことに愉快である。

川に並んで、釣つてゐた多くの人が帰途についた後、自分一人が磧(かわら)へ居残つて、一時間ばかりも一服喫つた後、短い竿を操縦して静かに岸近いところを釣ると、日中は深いところに隠れてゐた大きな鮎が、どこからともなく集つて来て、面白いやうに鈎に掛る。そろ〳〵と後すざりに上流へ囮鮎を引き上げて行くと、直ぐグッと掛る。忙しい位だ。

水垢の研究は、鮎釣人の生命であると思ふ。

# 青空文庫情報

底本：「集成　日本の釣り文学　第九巻　釣り話　魚話」作品社
　　1996（平成8）年10月10日第1刷発行
底本の親本：「釣の本」改造社
　　1938（昭和13）年4月
※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。
入力：門田裕志
校正：山本弘子
2010年5月31日作成
2011年4月22日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水垢を凝視す

佐藤垢石

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/